

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●熊本大学薬学教育部分子機能薬学専攻

「創薬研究者養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

平成20年度に既に設置している DDS コースに加え、バイオフーマコースとメディシナルケミストコースを設置し、分子機能薬学専攻の三コース制による創薬研究者養成教育をスタートさせた(同時に講義・実習などを以下に述べるように全面的に改組した)。これは出口(このような創薬研究者を育ててほしいという社会からの要求)から教育システムを考える画期的な試みであると考えている。

上記改組時には、以下のように、人材養成目的の規定を改めた。

教育目標：本教育部の分子機能薬学専攻は、医薬品創製の現場で主導的役割を果たす、バイオフーマ(生物系創薬研究者)、メディシナルケミスト(化学系創薬研究者)、DDS スペシャリスト(製剤系創薬研究者)の育成を目的とする。

講義は基礎講義(バイオフーマ、メディシナルケミスト、DDS コース共通講義：それぞれのコースの導入的講義)と専門講義(各コース別講義)、実習は基礎実習(三コース共通実習：ビジネス関連実習や臨床開発実習など)と専門実習(各コース別、それぞれのコース担当教員が全員で実習を行うことにより、各研究室の得意な技術だけでなく、網羅的、系統的な技術が身につくようになる)に分けた。上述のように本プログラムでは出口から教育システムを考えることを目的としている。そのためそれまでの講義・実習(各研究室毎に教員の専門分野を教える教育)を改め、網羅的、系統的、組織的な講義・実習(各コース所属の教員全員で行う、コース単位での講義・実習)を考案し実行した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

特任助教2名は全ての講義・実習に参加し、カリキュラム委員会が設定したその講義・実習で教えるべき知識・技能が身に付く内容になっているか、各講義・実習間で重複はないかをチェックし、必要に応じてその改善を担当教員と議論した。その結果、実習がより院生にとって有益なものになったと考えている。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

3年間のプログラムであり、また新しいカリキュラムが開始されて2年間しか経っていないので、就職率、入学志願者数、定員充足率、学生の活動量(論文や学会発表数)等には大きな変化はない。しかし新カリキュラムでの最初の博士前

期課程修了者は研究者指向が強く、博士課程進学者がかなり増加した。また、最初の博士前期課程修了者からの聞き取り調査から、

- (1) 臨床実習やビジネス実習など新たに開発した講義、実習は有益であり、それをきっかけに将来創薬研究者になりたいと考えるようになった。
- (2) 多くの企業研究者と交流したことにより、製薬企業を身近に感じられるようになり、将来を考える際に役立った、あるいは就職活動で役立った。
- (3) 同じ専門の院生だけで行う実習は、かなり専門性が高く、日頃の研究にも大いに役立った。などの意見が多かった。